

隔月連載 蔵出し住宅

近代建築アーカイブ / 隠れたる逸品を探る

第8回

三つの

ドーム・コムナ

1928-1930

文=山崎揚史

写真=Iliya Yamazaki

写真:「ナルコムフィンのドーム・コムナ」
廊下側外観

コムナとは聞き慣れない響きである。舞台は社会主義革命直後のソビエト連邦、現在のロシア。多数の人間、家族を平等に包括するための集会的生活の場が構想されたのである。その建築デザイン、思想は、ほとんど神話めいた集合住宅像となって現れた。しかし約10年間で、その活動は途絶えてしまったという。蔵出し住宅に相応しいテーマといえるだろう。社会主義、平等、これらは蔵出しというよりは、次第に封印されつつあるテーマである。でもコムナが興味深いのは、それら大文字の

テーマに連動しつつ、家族という自明の理を、極限的にまで批判していった運動であったことである。社会主義とは、階級なき一つの共同体を、家族という「プチブル」にかわって樹立しようとした運動だったともいえる。家族を否定する国家という「家族」。この矛盾は、早晩にして察知されるだろう。しかし平等は、いかにして制度（秩序）になりうるか。これはさらに深みにはまる普遍的な問いに違いなかった。そしてこのような難問こそが、私たちがあんのんとよりかかっている家族、

ひいては集合住宅像の外側を見せてくれるのである。現在の日本における家族単位で完結してしまっただろうか。結局私たちが、ぜいたくな「牢屋」にしか住めないかぎり、コムナの作業を笑うことはできないはずである。集合の深い意味を再検証する機会を与えてくれたのは、筋がね入りの近代ロシア建築研究者、そして建築家である山崎揚史氏である。
蔵出し住宅準備委員会 中谷礼仁

コムナという組織

ロシア革命直後1920年代のモスクワにドーム・コムナと呼ばれる集合住宅が建設された。それは、当時の新進若手建築家が総力を結集したもののひとつであったが、わずか約10年間でプツリ結末を迎えてしまった。そのためか、十分にその紹介がされず、社会主義社会とは関係をもたない私たちにとって特殊な社会の産物としてのみ理解されてきた。そこで今回は、このドーム・コムナを紹介したい。

ドーム・コムナとは

共産主義：コムニズム(КОММУНИЗМ)は、コムナ(КОММУНА)から派生した言葉である。本来コムナは、財産や労働を共有する生活共同体を示すいわば社会組織の一形態の呼び名であった。その社会形態をつくらうとするイデオロギーがコムニズム：共産主義ということになる。そこで、生活共同体としてのコムナという組織によって住民の生活が運営される住居をドーム・コムナと呼んでいるのである。このドーム(ДОМ)はロシア語で家を示し、直訳すればコムナの家ということになるが、一つの「大家族」(生活共同体)が同じ一つの屋根の下に暮らすイメージによるものようだ。そのため、ドーム・コムナは生活共同体が一つの建物に集住したときの建物のことを指す。

もちろん、このようなコムナの集住形態だけでなく、ある地域にひとつの生活共同体を集住させるような都市計画的コムナや、新しい機能を付加できるような都市的スケールの大規模なコムナも出現した。よって、ドーム・コムナは、生活共同体：コムナのひとつの集住形態となるのである。

このようにみえてくるとドーム・コムナは、確かに共産・社会主義の産物として理解されるが、大切なのはコムナがある社会組織のみを指し、建築スタイルを指すものではないということなのである。いわば、どんな建物でもそこに生活共同体が住み始めれば、ドーム・コムナとなってしまうのである。これは、コムナの変遷を知ることによってより明確なものとなっていく。

革命と日常的コムナの出現

19世紀末よりロシアの都市人口は、急激に増加し始めた。19世紀中期およそ30万人であったモスクワの人口も19世紀末には約100万人に、1915年には約200万人弱に膨れ上がった。これは、工業化による工場労働者の増加によるところが大きいのである。そのころからモスクワの住宅不足が始まった(この住宅不足は、今日なお大きなモスクワの抱える都市問題である)。この増加する工場労働者に対して、革命前までおもだった住宅政策は行われなかった。そのため、工場に付帯するようにつくられた木造のバラック(住居というよりは収容所のようなもの)や間貸しのアパートに労働者は居住していたのであった。この状況に大きな変化が現れたのが、1917年のロシア革命を境にしてであった。

このロシア革命の要因については諸説あるが、この劣悪な生活環境に対する労働者の不満も革命に拍車をかけたことにはかわりはない。

革命後すぐ、国家は共産主義社会の建設のための新たな法を制定していった。

そのなかで最も住環境の様相を変化させたのが、1918年8月20日に制定した「すべての個人所有の不動産の国有化に関する法」である。これによって、都心のブルジョア階級の邸宅が国家に受け渡され、それが労働者に開放されたのであった。分かり易くいえば、金持ちの邸宅が国に没収され、そこに労働者がなだれ込み居座ってしまう状況であった。国は、すべての労働者に対し無賃での居住を許したので、その勢いたるや堰を切った流れのごとし、壮絶なものであったようだ。そのとき都心になだれ込んだ労働者の数がおよそ50万人ということからもその規模が想像できよう。これによって、モスクワの労働者の人口分布は大きく変化し、郊外にいた労働者階級の人人が都心に居住しはじめたのである。

また、このような状況からロシアのブルジョア階級の多くが海外に亡命していったのも事実である。

しかし、大量の人が住めるような収容能力は、都心のブルジョア階級の邸宅にはなく、この労働者たちがブルジョア階級のような住環境を得られたわけではない。

革命前一世帯が住んでいた邸宅には、邸宅の部屋数もしくはそれ以上の世帯がまとまって住んだ。いわば、ひとつの邸宅に複数の家族が同居するようなかたちとなったのである。そのため、台所、浴室などは共有し、しかも食事と一緒にとり、洗濯も共同で行い、育児もまとめて行うようになった。これは、単に共同炊事場や共同洗濯場といったようなものでなく、その家に同居している人々すべてに炊事当番、洗濯当番、育児当番などのような役割分担がされ、同居者すべてが一家族といったような生活共同体が組織化されていったのである。これが、コムナの始まりなのである。そして、この自然発生的にうまれたコムナを「日常的コムナ」と呼ぶ。

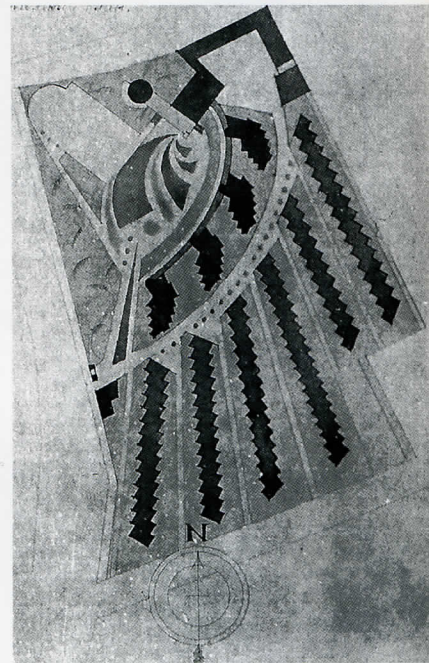


図-2 K.メーリニコフのコムナ コンペ案/配置図 1922年

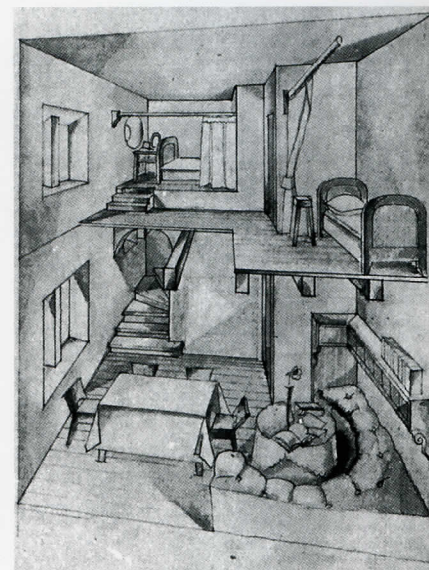


図-3 コムナ コンペ案/住宅ユニットセクションパース

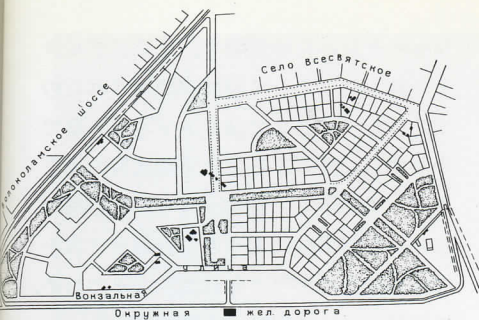


図-4 N.マルコフニコフの「ソーコル」計画配置図 1923年



図-5 「ソーコル」計画住宅外観 (撮影：1993年)

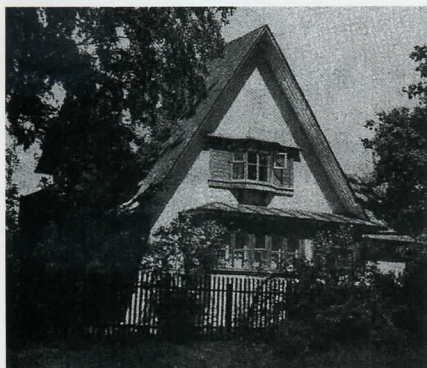


図-6 「ソーコル」計画住宅外観

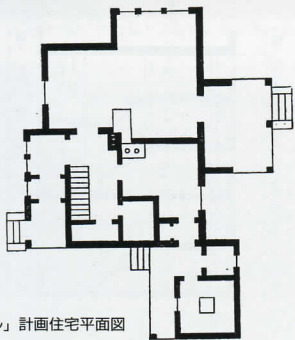


図-7 「ソーコル」計画住宅平面図

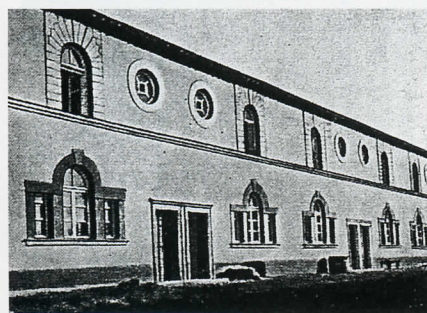


図-8 I.ジョルトフスキーの「AMO」工場労働者住居 1923年

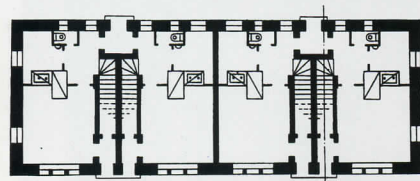


図-9 「AMO」工場労働者住居平面図

コムナに適する建築タイプ

「日常的コムナ」の受け皿は、あくまでも既存のブルジョアジーの邸宅であったため、もちろん建築機能的不都合が生じてきたのであった。そこで、この新しい生活システムに適した新しいタイプの住宅建築を考案することが、建築家たちに課せられた。

1920年、新しい建築形態を模索するN.ラドフスキーによってはじめてコムナ用住居が発表された(図1・133頁参照)。これはいくつもの個室が中央の広間によって連結し、全体的にはひとつの塊をつくる案であった。ここでは、建築形態の新たな探求に主眼が置かれた。いわばラドフスキーの一連の古典(クラシズム)の体系にかわる新しい体系をつくる作業の一貫として制作されたものであった。そのため、ある意味で経済効率や実現性は度外視されたともいえる。しかし、これはコムナという新たな建築のタイプが、既存の建築手法によってつくるものではないという考え方を提示したことに大きな意味がある。

その後、1922年に国家主催のコムナのコンペが開催された。モスクワの二つのシミョノフスキー地区とザモスコフスキーレーチキ地区にコムナをつくる計画であった。ただ、国家レベルといってもゴロソフ、ベスニン兄弟、メーリニコフの三者のみが案を提出しただけであった。ここでは、三者とも住居のユニットタイプ化が検討され、いくつかのユニットが連続する計画案が提出された。

そのなかでも、メーリニコフ案が最も興味深く、単身者用の棟と家族用の棟と二種類の棟に分け、その棟がいくつものメゾネット型の住居ユニットが雁行しながら連続する案を提出した(図2・3)。ここには、メーリニコフ自身の住居に対する個人的な考え方が反映しているともいえる。それは、かれのアトリエ付き自邸を建設するときにもベースとした考え方で、家族をひとつの独立した単位として考えることであった。これは、当時の社会的共同体思想に逆行するものであったともいえよう。このコンペ案では、ユニットを雁行させていくことにより一家族のユニットが独立したものとして見えてくるのである。そして、それが敷

地の端まで連続及び接続されることによってひとつの共同体としての塊を形成するのである。またこの雁行連続のアイデアは、1924年のノーヴォースーハレフスキー市場の計画で応用し、実現された。

コムナの実現化に向けて

しかし、このコンペの計画案が実施されることはなかった。そこには、革命内戦状態によって落ち込んだ国家の経済事情があったのであった。そのため、まず最初に実現したコムナは、協同組合(コペラティーフ)によるコムナであった。それは、建設費を政府と個人または労働組合とで分割する方法で政府の負担を軽減するものである。その代表的なものが、ソーコルの田園都市型コムナ(1923年)と「AMO」工場の労働者コムナ(1923年)であった。

この経済的問題は、建築の構造にも波及し、セメントや鉄の不足より、木造またはレンガ造の2階建の低層なもののみが建設可能な範囲であった。そのため、ソーコルにおいては木造、「AMO」工場では2階建の低層レンガ造が採用された。ソーコル地区は、モスクワの都心から北西約10km離れた工業地域に位置する。

その一街区にコムナを建設する計画であった。ここでは、ロシアの農村都市をイメージした田園都市型コムナがつけられた(図4~7)。ハワードの田園都市構想の小型版といったようなものだ。各々小さな庭を持つ戸建のロシアの伝統的木造住宅が農村の風景のごとく点在する区画をつくり、その区画がひとつの生活共同体として組織されるコムナであった。この設計にあたったのは、建築家：N.マルコフニコフであったが、ロシアの伝統的建築スタイルの復興を提唱する当時モスクワ市建築局長であったA.シューセフがこの案を推したことがこの計画の実現に大きな力となったのである。

これと同じ23年に「AMO」工場の労働者コムナが、古典主義建築家I.ジョルトフスキーによってつくられた(図8・9)。レンガ造2階建の長屋のようなもので、パラディオ研究家である彼にとって経済効率重視のための苦労がみえるものとなった。しかし、彼がそこで考えたことは、バラックのような収容所しかできない経済状況でいかにして住居としての雰

囲気を出せるかということにあったようだ。その苦勞が窓廻りの外壁装飾や丸い窓から感じられるのである。そのためか、これ以降30年代の経済復興期まで彼は建築をつくることをしなかった。

このように、この時期のコムナはまだその生活組織をひとつの建物のなかに凝縮するようなドーム・コムナのようなものではなかった。

ドーム・コムナの誕生

しかし、いろいろなアイデアが実現してはいたが、モスクワの急増する労働者人口に追いつくことはまったくできなかった。そこには、経済状況のため強いられた低層住宅の抱える物理的問題があった。それは、限られた都市の敷地で収容できる人口が限定されてしまい、それではまったくその急増する人口を収容することが不可能であったことにある。

そこで、1925年ごろから、国家の建設局(ストロイコム PCΦCP: ロシア・ソヴェエト連邦社会主義共和国建設委員会)は、効率よい中高層のコムナ建設に向けて、その住宅タイプの実現化を始めた。このとき、ドーム・コムナの実現化が始まったともいえる。まず、この効率の良さは、もちろん経済的構法の検討もあったが、最も重要視したのは、最小の共有面積で最大の世帯を収容することにある。共有する階段廊下などの面積を最大限少なくする平面、断面計画の検討であった。この検討によっていくつもの住宅タイプが考案されていったのである。

この作業にあたった建築家は、主に当時のコンストラクティヴィストの面々で、ギンスブルク、ウラディミロフ、パステルナーク、バルシュたちであった。この建設委員会が経済人民委員会(大蔵省)の全面的バックアップのもとにあったのは、当時の大蔵大臣ニコライ=ミリューチンが新しい都市計画の手法に大きな展望と興味をよせていたことにある。彼は都市計画家でもあり、1930年には自らの書『ソツゴロード』においていくつかの都市計画案を発表した人でもある。そして、20年代後半よりこの新しい住宅タイプが実験的に実現され始め、モスクワ市内にさまざまなアイデアによるドーム・コムナの建設が開始された。この

中の3つの実例をこれから紹介したい。

世帯単位型コムナ

経済人民委員会(ナルコムフィン)のドーム・コムナ(1928-30)

経済人民委員会からの要請で、この委員会の官舎として1930年にこのドーム・コムナは完成した(図10~16)。1928年ミ

リューチンからの依頼で、ギンスブルクとミリニスによって設計が開始されたのであった。ここでは、メゾネット型で半層ずらしたところに上下階共有の廊下をもつ効率的な「住宅タイプF」が採用され、世帯単位の大きさに合わせて大小二種類の住戸がつくられた。そのため、6階建のこの建物は、1階がピロティー

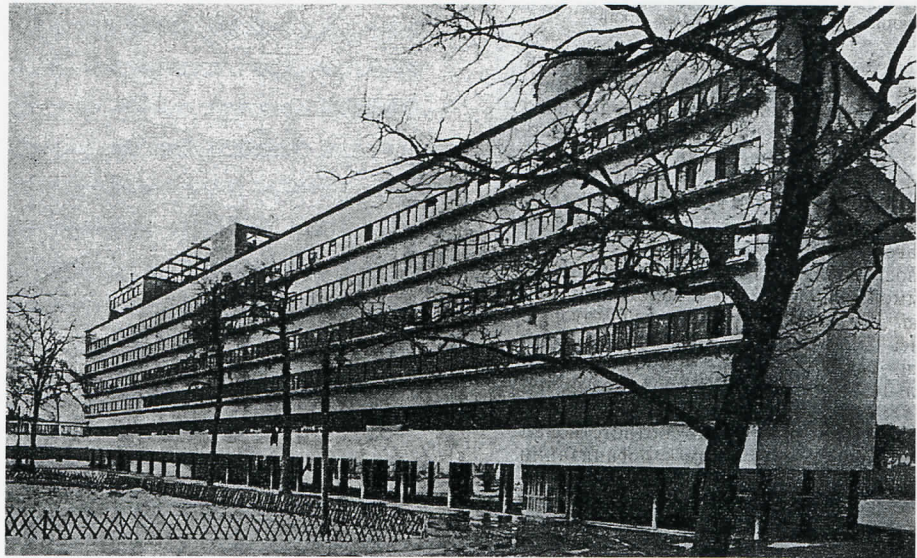


図-10 M.ギンスブルク, I.ミリニスの「ナルコムフィンのドーム・コムナ」外観 1928年

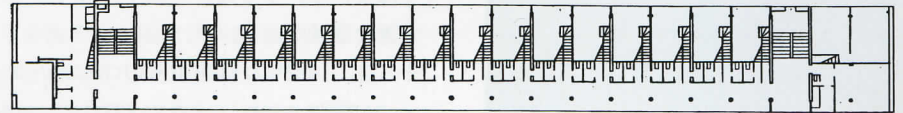


図-11 「ナルコムフィンのドーム・コムナ」5階平面図

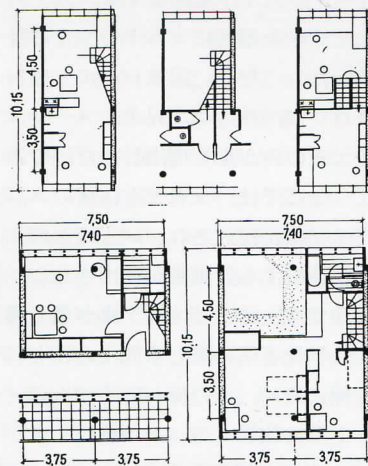


図-12 「ナルコムフィンのドーム・コムナ」各階住戸平面図



図-14-1 「ナルコムフィンのドーム・コムナ」5階廊下

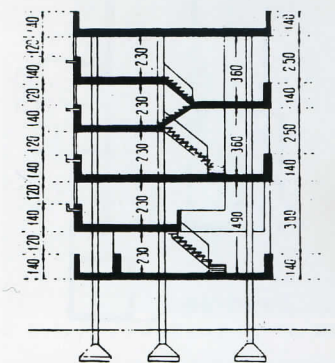


図-13 「ナルコムフィンのドーム・コムナ」住居断面図



図-14-2 「ナルコムフィンのドーム・コムナ」廊下

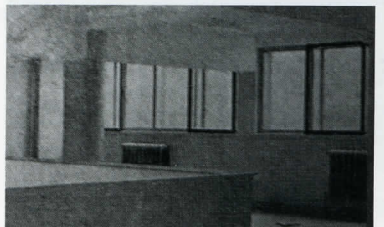


図-15 「ナルコムフィンのドーム・コムナ」3階、家族住戸寝室